

『一遍上人語録』

※宝満寺にて、※由良の法燈国師に参禅し給ひけるに、国師、※念起即覚の話を拳せられければ、上人かく読て呈したまひける

となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏の声ばかりして

国師、此歌を聞て※「未徹在」とのたまひければ、上人またかくよみて呈し給ひけるに、国師、※手巾・薬籠を附属して、※印可の信を表したまふとなん

となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏なむあみだ仏

(大橋俊雄校注『一遍上人語録』岩波文庫 p.65-66)

※宝満寺 神戸市長田区東尻池町に現存。

※由良の法燈国師 由良は和歌山県日高郡由良町。法燈国師、諱は覚心。信濃国神林の人。建長元(一二四九)年春入宋、居ること五年、同六年帰朝し、正嘉二(一二五八)年由良に西方寺を建立、永仁六(一二九八)年九月、九十二歳をもって示寂した。

※念起即覚の話 参考『無門関』(西村恵信訳注 岩波文庫) 187-189p

※未徹在 未だ徹底した悟りに入ってはいない。

※手巾・薬籠 手巾は手や顔を拭う布、薬籠は薬のはいっている籠。

※印可の信 印信認可のしるし。禅宗では、師家が学人の心地を洞観して、機法の円熟したものに証明認可するを例としている。